昭和43年3月
秋田県文化財調査報告書　第15集

# 武蔵野竪穴住居址群

## 第二次調査報告

秋田県教育委員会
田沢湖町教育委員会

# 序

田沢湖町所在、武蔵野堅穴住居群は、遠く大正１４年に田口耕之助氏によつて発見され、その後、武藤一郎、深沢多市氏等によつて、数年にわたり調査が実施されました。

そして有刺鉄線をめぐらす等の措置が講じられ、保存が図られたのでありますが、その後、周囲の状況の変化によつて、２６個も数えられた堅穴も殆んどが荒され、今では知る人もない状態になつたのであります。しかるに最近、この地域が墓地公園化されることになり、遺跡が全面的に破壊される恐れが生じたので、田沢湖町教育委員会が主体となり、昭和４１年度、緊急発掘を実施しました。

そこで本年は、県教育委員会が、田沢湖町教育委員会との共催で、昨年に引き続く調査を実施しました。本年は、昨年度完掘できなかつた第二トレンチの完掘調査を目標にしました。その結果、住居地としての性格のほかに、昨年度確認できなかつた竈の規模、形式等も明らかになりました。

思えば、何十年もの間眠つていた、これら遺跡が、明確な形でとらえられたということは、まことに喜びに堪えません。遠く、大正１４年以来、これが解明にあたえられた、先学諸氏に対しても多少とも、はなむけが出来たものと存じます。勿論本年の調査をもつて、この遺跡の全貌が明らかになつた訳ではありません。今後継続して、解明されなければならないものであります。しかし、一応の調査結果をここにまとめ、同学諸氏のご参考に供する次第であります。ご活用を願つてやみません。おわりに、調査員としてご苦労をいただいた豊島昂氏、その他の方々、また田沢湖町教育委員会の皆様に感謝申しあげます。

昭和４３年３月

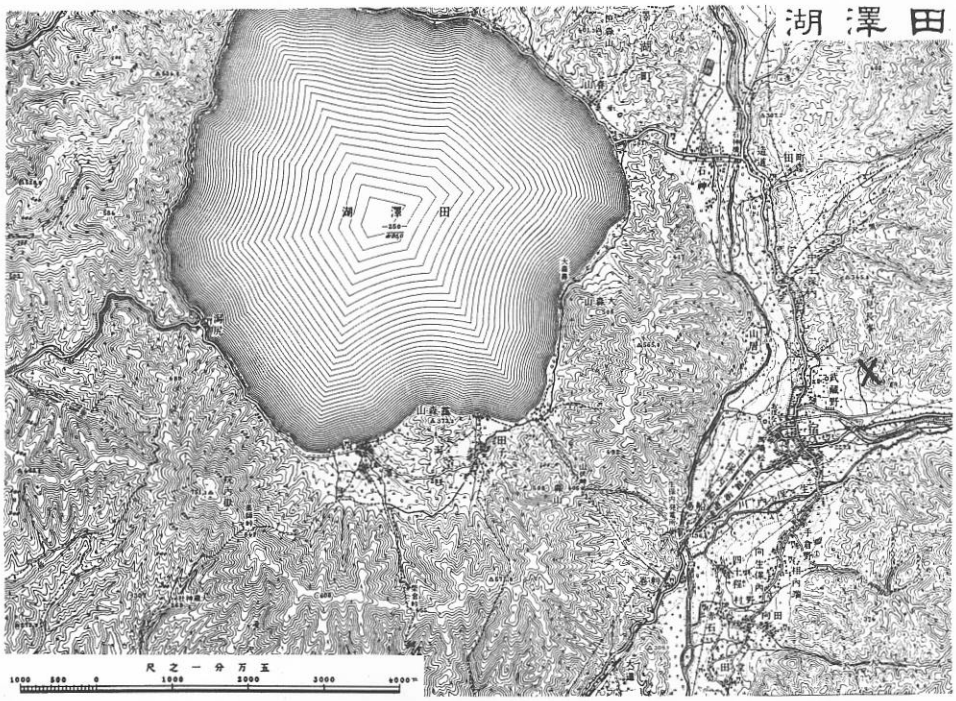
秋田県教育庁社会教育課長

寺　田　光　和

# 目　　次

序
1. 遺跡の立地 …… 1
2. 発掘調査にいたる経過 …… 1
3. 第二次調査の要項 …… 2
4. 発　掘 …… 3
5. 遺　構 …… 4
6. 遺　物 …… 7
7. 結　び …… 8

挿図目次、図版目次
第1図　遺跡附近地形図　5万分の1図 …… 1
第2図　武蔵野堅穴住居址群第2次調査平面図（堀川幸男、千葉和夫図） …… 3
第3図　住居址内上層用材出土状態実測図（千葉和夫図） …… 4
第4図　住居址床面残存用材出土状態実測図（堀川幸男図） …… 5
第5図　住居址縦断面図 …… 5
第6図　竈実測図 …… 6
第7図　出土須恵器実測図 …… 7
図版1. 住　居　址 …… 9
2. 住　居　址 …… 10
3. 住　居　址 …… 11
4. 住　居　址 …… 12
5. 住　居　址 …… 13
6. 竈 …… 14




第１図　遺跡附近地形図

## 1　遺　跡　の　立　地

武蔵野は元来広大な原野で、生保内川の流れによつてつくられた扇状地である。遺跡は田沢湖線、田沢湖駅の東北約１Kmのところにあつて、扇状地及び扇状地に接する丘陵西斜面に営まれている。従つて斜面に造営するために特に工夫をこらしている様子が発掘調査の結果うかゞわれた。

## 2　発掘調査にいたる経過

当遺跡は大正１４年田口耕之助、故深沢多市の両氏によつて発見され、その後両三度にわたつて小規模の発掘調査が実施された。註１

更に近年の住宅圏の拡大と、田沢湖町生保内地区の都市計画によつて、遺跡附近もその対象となつたため昭和４１年７月２５日から８月８日まで、田沢湖町教育委員会が主体となつて第一次調査を実施した。註２

今回の発掘は第一次調査によつて完掘出来なかつた２号トレンチが中心で、他に一個所田口氏

らの分布調査によつて1号住居址と呼称された地点もその対象とした。

註1. 昭和3年10月1日「秋田県生保内村の竪穴」故深沢多市氏、田口耕之助共著東北文化研究第1巻2号

註2. 昭和42年3月31日「武蔵野竪穴住居址群第一次調査報告」田沢湖町教育委員会

## 3 第二次調査の要項

(1) 調査主体

秋田県教育委員会

田沢湖町教育委員会

(2) 調査期間

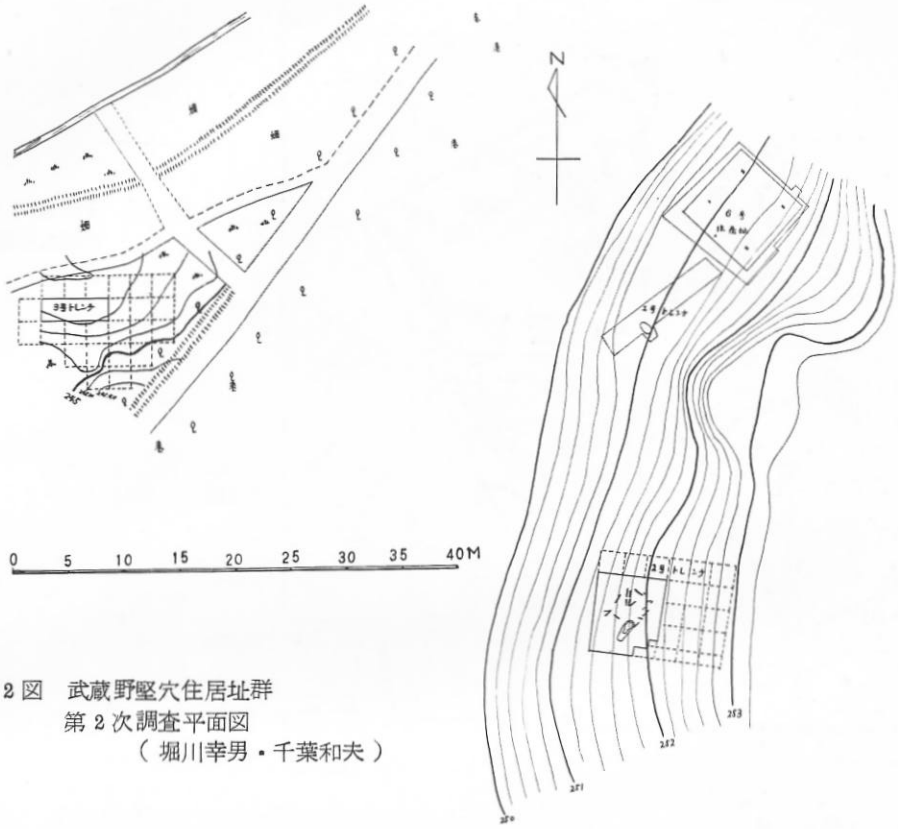
昭和42年8月1日より8月8日まで

(3) 調査の場所

田沢湖町生保内字武蔵野105の1　100m²

(4) 調査員

| | |
|---|---|
| 秋田県文化財専門委員 | 豊島　昂 |
| 補助員 | |
| 羽後町軽井沢小学校教諭 | 永瀬福男 |
| 測量員 | |
| 角館高校田沢湖分校教諭 | 堀川幸男 |
| 田沢湖町田沢 | 千葉和夫 |
| 事務担当者 | |
| 秋田県教育庁社会教育主事 | 加賀谷辰雄 |
| 〃 | 吉川欣一 |
| 田沢湖町教育委員会 | 浦山久志 |




第2図　武蔵野堅穴住居址群
第2次調査平面図
（堀川幸男・千葉和夫）

## 4　発　　掘

2号トレンチは第一次調査において、検出された用材などから住居址遺構と推定したが、日数の関係で完掘にいたらなかつた。今回の調査はこの推定された住居址を完掘するのが第一目的である。他に田口氏らによつて1号住居址とされた地点を3号トレンチとし、共に調査を実施した。特に2号トレンチに於いて発掘された住居址は、田口氏などによつて作成された分布図には記録されていない遺構である。この調査によつて明らかにされた遺構・遺物は次の通りである。

遺　構

イ　2号トレンチ内住居址の規模の確認。

ロ　3号トレンチ遺構の検出なし。

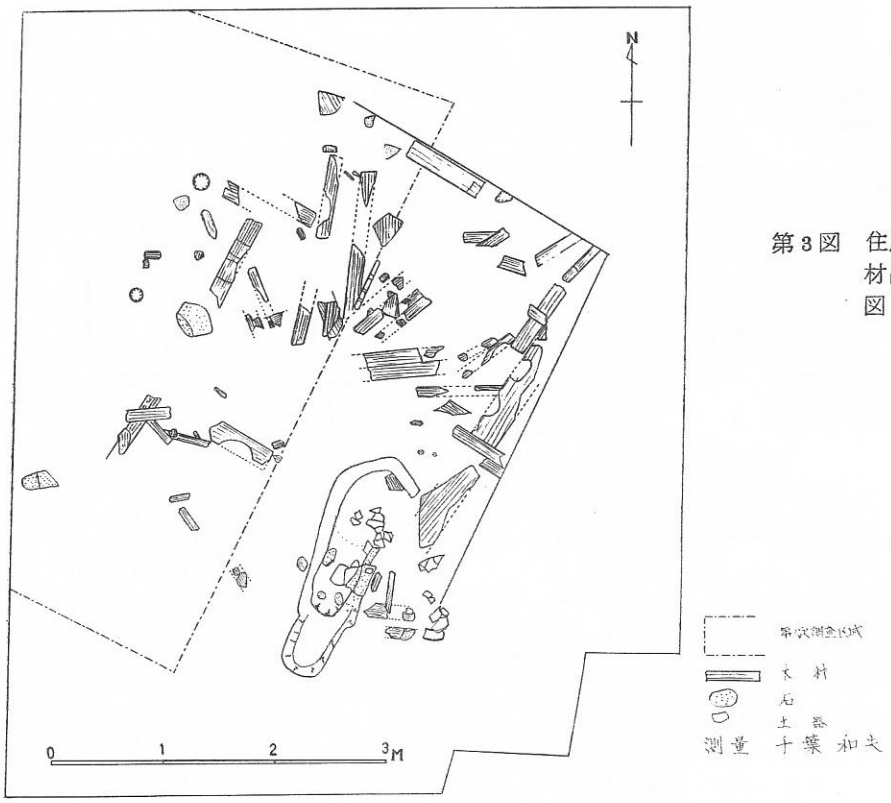
遺　物

イ　2号トレンチ内住居址

(1)　須恵小壺　　1個

(2)　須恵甕　　1個

(3)　土師器鉢片　　若干




第３図　住居址内上層用材出土状態実測図

ロ　３号トレンチ

(1)　縄文土器片（後期末）　若干

以上であり、個々については項を改めて記述する。

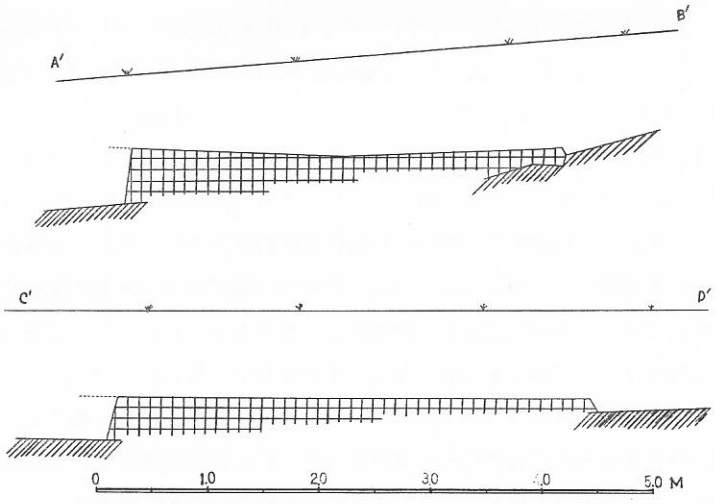
## 5　遺　　構

(イ)　２号トレンチ内住居址

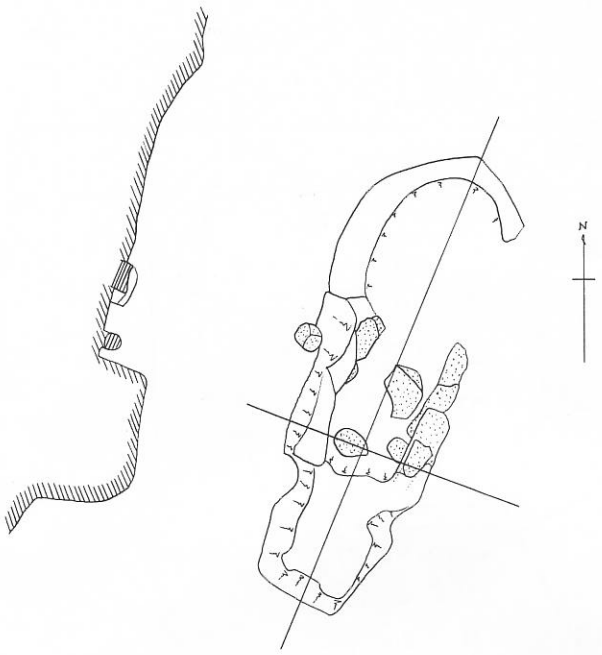
２号トレンチは第一次調査の際、６号住居址の南に設定したトレンチである。除土作業の結果、トレンチ内全域にわたつて木炭の小破片がみられ、ところによつては焼けカヤが厚く堆積していた。この堆積層の下からは家屋用材と推定される多数の炭化された木材が発見された。これにより住居址と推定したが、完掘にいたつていなかつたものである。

第二次調査ではトレンチを６ｍ×７ｍに拡張して、住居址の完掘による規模の確認を第一の目標とした。発掘が進むにつれて、焼木片の分布範囲が限定されるようになる。約４ｍ四方となり上部には第一次調査に際して検出したようにカヤ、小枝、小角材等の炭化したものが多く、所によつては放射状の広がりがみられた。（第３図、図版１の１、２の１）更に南側からは竈址が検出された。竈の側壁は石と粘土で築いた立派なものである。壁は東と北の一部が明確に

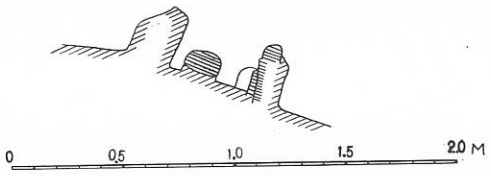
第4図　住居址床面残存用材出土状態実測図（堀川幸男図）




第5図　住居址　縦・断面図



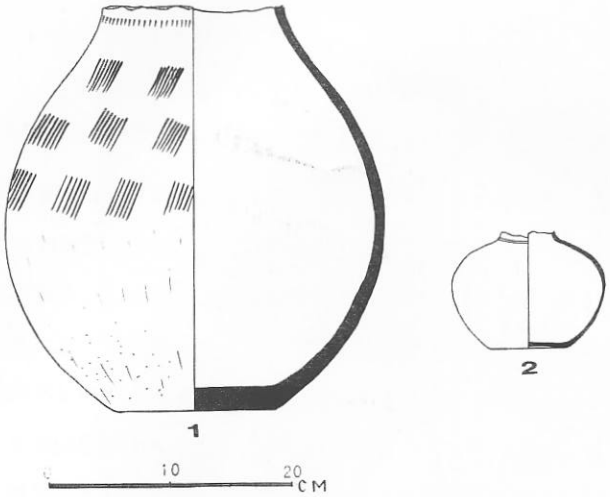

第6図　　竈実測図




検出されたにすぎない。これは住居址の立地条件によるもので、東北部がやゝ高く山側となり反対に南西部が谷側となつている。そのためこの住居址を営むにあたり、東側では一部に掘り込みをつけ、西側には盛り土をして床面となるベースを作つているのが知られた。（第5図）従つて東側を除いた三方の壁は明確なものではないが、出土品などから一応の線を定めたものである。この住居址の方位は南北線より約25°東傾、これが住居址の長軸となる。これは平地式住居址で壁は板壁、第3図の東・北側に周壁と平行に見える板がそれである。従つて壁は横破目板を使用したもので、この破目板をおさえる用材も一部検出されている。破目板――カヤの層を掘り下げると床面があらわれる。（第4図参照）床には敷板が残されている。床面の南側は竈並びに床面まで粘土が硬く踏みしめられていた。柱の所在は床面からは検出することが出来なかつた。たゞ周壁に並んでいる前記破目板のおさえの用材だけである。この住居址内から発見された遺物の大半をしめる木材は、用材の外側が焼け、内側は腐触し原型をとゞめない程に変形している。第一次調査では鉄鏃等が検出されているが、今回はなかつた。

他に土師器鉢片や、須恵器壺に竈付近から須恵器甕が発見されている。

(ロ) 竈南壁中央からやゝ東寄りに発見される。高さ30cm、巾50cm、長さ120cmで燃焼部は巾30cm、奥行き60cm、石と粘土で構築されている。竈の前庭には灰をかき出すための窪地もある。竈入口左右に石を配している。奥にも2個の石が配されて煙道につながるのだろうが、煙道は確認されなかつた。この竈の上部及び左右と前庭部にかけて須恵器、土師器の破片が散乱し、第7図の1は復元したものである。竈は内壁及び前庭の灰の状態から長期間使用された




第7図　出土須恵器実測図

ものではない。

(ハ)　3号トレンチ

前述の如く、田口氏等によつて作成された分布図に1号住居址として記録された地点である。今回の都市計画道路中に含まれるため調査の対象とした。立地条件は武蔵野扇状地の扇側で、丘陵と接する谷間にあたる。ここに2m×8mのトレンチを設定した。土壌の堆積状態は扇状地からと丘陵の両方からの土壌の流入があり、かなり渾然とした状態を示している。これらの土壌に縄文時代後期の土器片が包含されている。基盤層は西面するかなり急な傾斜面であり、遺構は検出されない。従つてここに6号住居址及び2号トレンチ内住居址と同時期の遺構は発見されなかつた。

## 6　遺　　物

出土遺物の比較的少ない遺跡であるが、第一次調査に際しては平根柳葉形の鉄鏃を出土している。用材については前述の如くほとんど計測出来ない程に変形している。什器類は破損しているが、個体にすれば約10個程の土師・須恵器が発見されている。図示したものはそれらのうち復元出来た2点である。

(イ)　須恵小壺　　1個

長頸の小壺であるが、頸部は破損、床面上に散乱して発見されたもの。胎土はやゝ不良、焼成は良く器壁はきわめてうすく出来上つている。胴張りの様子は平鹿郡雄物川町末館窯址出土の長頸壺と趣を一にしている。

(ロ)　須　恵　甕

竈の付近に散乱していたのを復元したものである。胎土、焼成共にきわめて悪い。口縁部を欠いているが、頸部に直角の突さし文がめぐらされている。肩より胴部にかけて櫛目があり、以下底部にかけては篦による磨研のあとがある。

同一住居址内からこの2点の須恵器が発見されたのは、今後この種遺跡の生活什器のセットの様子や年代推定などにも貴重な資料となる。

## 7 結　　び

所期の目的であつた2号トレンチ内に発見された住居址の完掘による規模の確認は、満足なものではなかつたが一応なされたと思う。更に6号住居址では、竈の規模、形式など不確実であつたものが、今回の調査で明らかにされた。又当時は昨今程住宅事情が緊迫していなかつただろうに、当住居址のように傾斜地をわざわざ整地してまで建築しなければならない理由はどこにあつたのだろうか。建築そのものもあまりに仮普請にすぎるようである。本来の建築であれば6号住居址の如く強固な柱をかまえなくてはならないのに、それが見当らない。傾斜地を整理してまで一時的な建築物は作るまい。とすれば当住居址の東又は北に主なる建築物があつて、その附属の建物として造られたのではないだろうかと推定される。尚調査はこれで終つたのではない。都市計画の実施にともなつて発見されるであろう種々の未知なる歴史は、そこに立つ人、歩む人、計画を実施する人々の協力によつてじよじよに解明されるものと思う。一人でも多くの理解者を集め、郷土の歴史を守りたいものである。

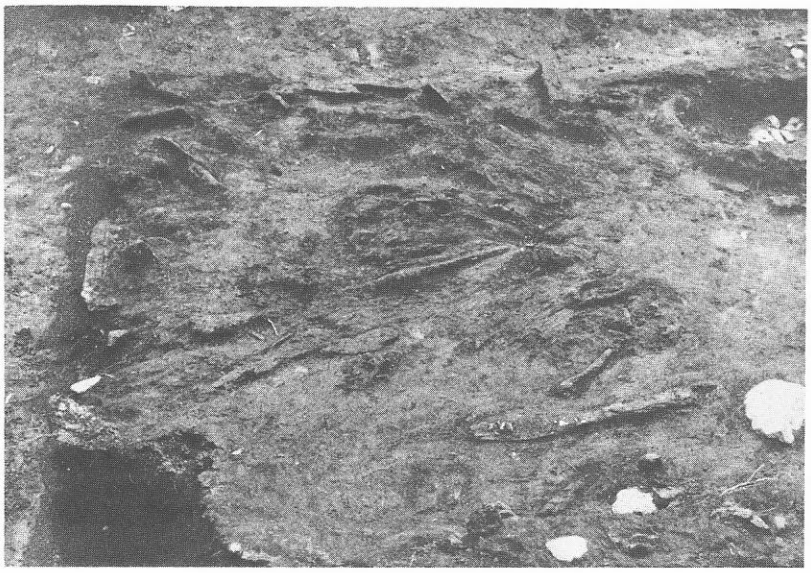
最後にこの発掘作業に連日よく働いてくれた高校生諸君、特に自費参加をしてくれた横手高校郷土史クラブの梅川君、又秋田考古学協会々員の五十嵐芳郎氏は勤務のかたわら秋田からの応援をいただき深く感謝しここに銘記してお礼を申しあげたい。

図版1

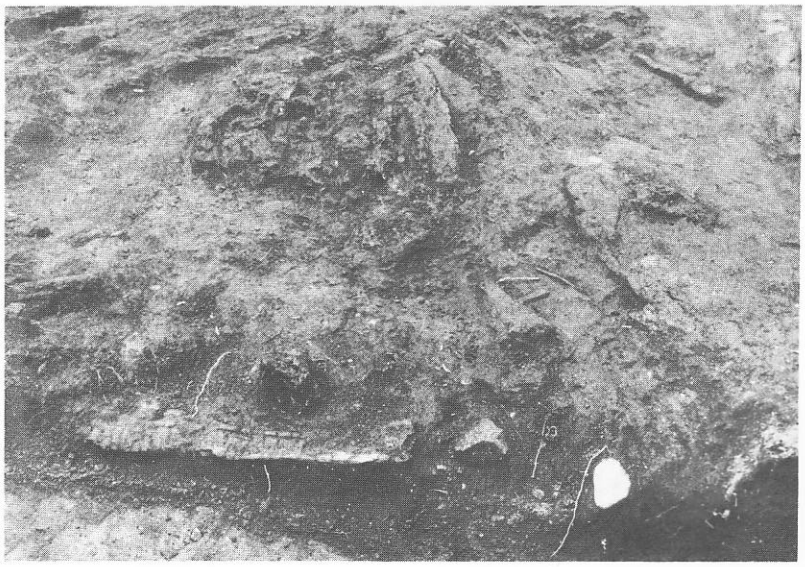
1　住居址　上層用材出土状態

2　住居址内東側用材出土状態

図版2

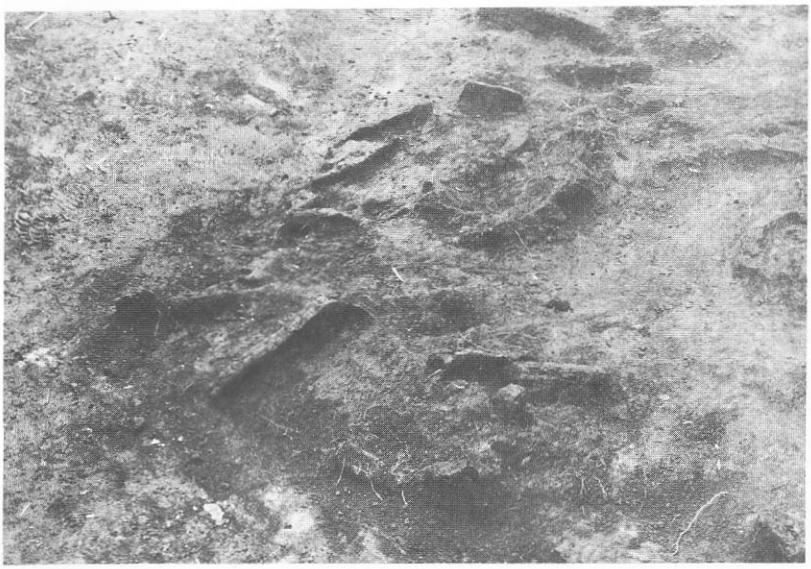


1　住居址内東北隅付近用材出土状態



2　住居址内北側用材出土状態

図版3

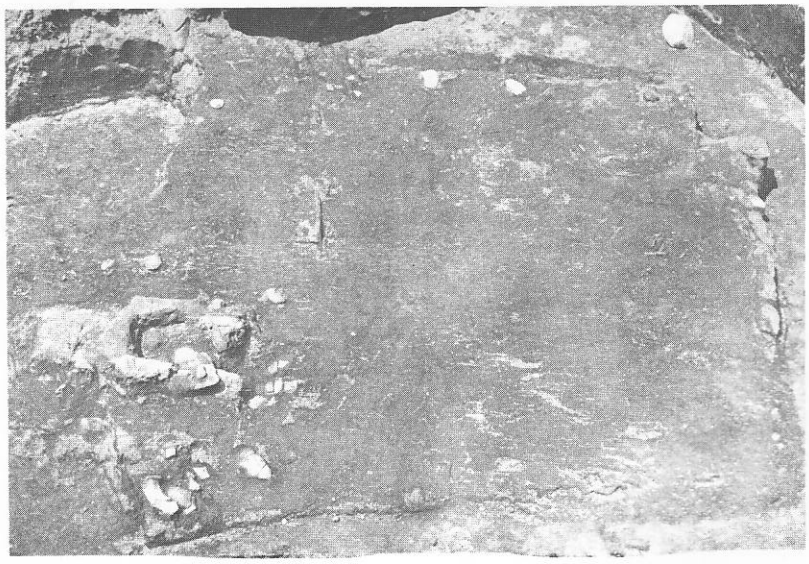


1　住居址内東北隅用材出土状態

2　住居址内中央部用材出土状態

図版4

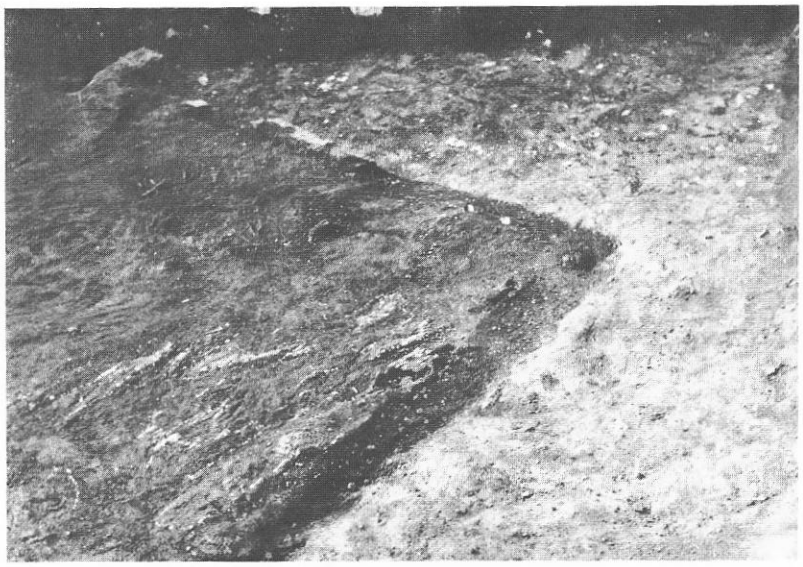
1　住居址完掘



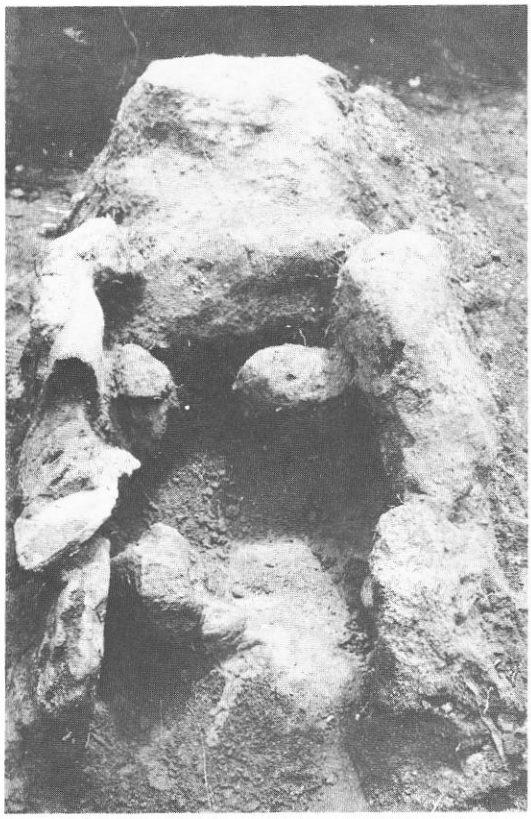
2　住居址完掘

図版5

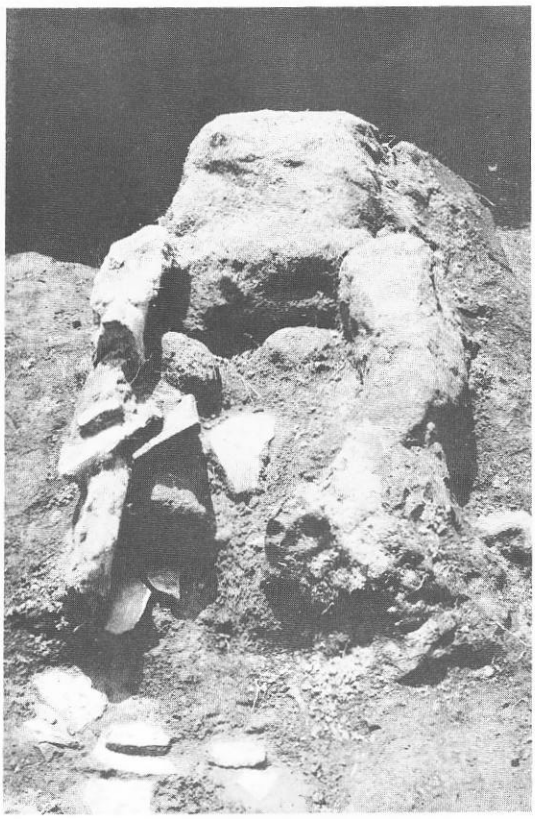
1　住居址床面用材残存状態



2　住居址床面用材残存状態

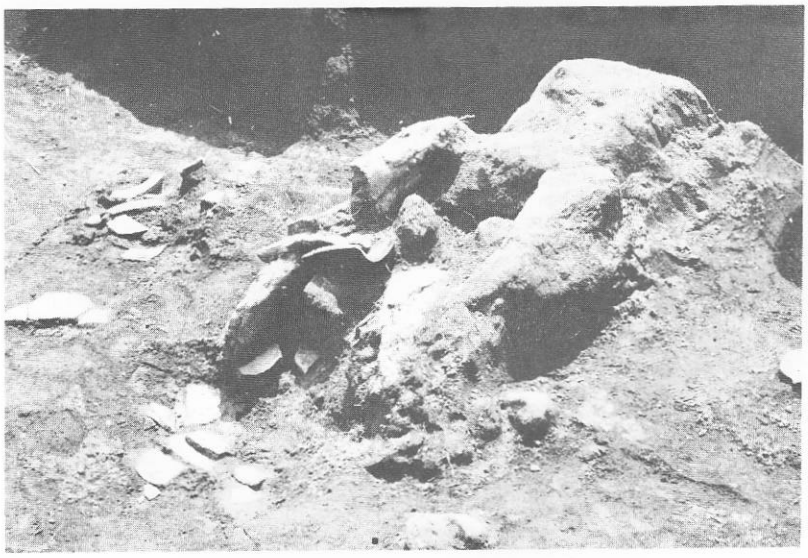


3　竈



1　住居址内竈

図版6



2　竈及び付近に散乱する須恵器破片

# 編　集　後　記

武蔵野竪穴住居群の調査は、暑いさなかの８月１日から８日まで行なわれた。

遺跡は、駅から歩いて約３０分、草いきれのむんむんする場所である。そこにテントを張つて調査を実施したのであるが、天候にも恵まれ、一応所期の目的を達成したものと思われる。この付近は、近来宅地化のすゝんでいるところであるので、今回の調査はまことに時宜を得たものと思う。しかも、発掘地点を含む周辺が、墓地公園の計画から外されそうであるとの話も聞いている。そうすれば、この地点が、現状のまま保存されることになるし、出来得れば、草木を伐採して、公園として整備されることが望ましいと思う。

さて、本年度の調査結果は、ご覧のようにうすいものであるが、ここにまとめることが出来た。執筆者である豊島昂氏のご苦労に感謝申しあげたい。またご多忙中ご協力いただいた田沢湖町教育委員会の浦山社教主事にも感謝申しあげる次第である。

昭和４２年３月

秋田県教育庁社会教育課

加賀谷　辰　雄

吉　川　欣　一